

COMMENT

戸 沼 幸 市（早稲田大学）

昨今、日本の地域づくり、都市づくりにおいて観光は中心的な話題になりつつあり、本研究は時宜を得たテーマである。特に、日本海沿岸地域において、戦後の工業開発の挫折、80、90年代に入ってから対岸貿易指向の停滞が背景にあらう。

本研究は沿岸41都市の主な観光資源をホームページから情報を得て、広報の仕方の未熟（外国向けのPR不足など）を指摘しつつ、多面的に分析しているが、逆に各都市とも徐々にこの方面に力を入れてきているという印象を受けた。対象都市を人口規模別にグループ化して特徴を適切に論じているが、札幌を沿岸都市として取り上げるのは地理的に言ってやや疑問である。あえてこれを論ずるのであれば、北海道一極集中の札幌としての視点があるのではないか。この延長線上には観光都市東京の問題があらう。

誰が観光をするのかの視点ももう少し明確にし

てほしいところである。日本人にとって、外国人にとって、対岸諸国の人々にとっての魅力といった視点からの知見を聞きたいところである。次なる研究の展開に期待したい。

コメンテーター自身、日本海沿岸のまちや都市を多く見聞してきたが、偶然の人や事物との出会いや、隠れた資源を発見して楽しんだ。謎への問い掛けを含んだ観光広報のあり方についての課題にも挑戦してほしい。

2004年10月2日、環日本海学会10回記念学術研究大会が、「大交流時代と北東アジアの新思考」を掲げて東京で開催された。この日は奇しくもイチローがシアトルでアメリカ野球大リーグ史上初の258本目のヒットを打ち、混住社会アメリカで大喝采を浴びていた。テーマを読み替えて「大交流時代の結節点と新生活様式」の見本でもあらうか。

中国東北三省の国際観光市場に関する考察

梁 春 香（東洋大学）
宇佐美 信 幸（東洋大学大学院生）

北東アジア地域をなす中国の東北部にある遼寧省、吉林省、黒龍江省のことは、通常東北三省といわれる（以下東北三省という）。東北三省の人口は1億385万人（2001年末の統計による）で、中国全人口の8.6%を占めており、面積は1,971,900平方メートルである。

周知のように、20世紀末期から中国経済が高度成長期に入り、とくに観光は国の基幹産業として

育てられてきた。2002年の観光統計によると、中国への来訪到着者数、国際観光収入ともに世界観光ランキングで第5位となり、受け入れ観光者数は世界観光全体の5.1%に占めるようになっている。そこで北東アジア地域の主要地域としての中国東北三省の観光市場の現状を把握して、北東アジア観光交流拡大への可能性を明らかにしようとするものである。

一、東北三省別のインバウンド者数と国際観光収入の状況

表1が示しているように東北三省の中で遼寧省は受け入れ人数、国際観光収入の両方ともに他の

三省より倍または数倍を上回ること、吉林省は東北三省のみならず、中国全国からみても観光が遅れた地域であることがいえよう。また、東北三省の観光発展に三省間に大きな開きがあることがわかった。

表1 2002年東北三省別のインバウンド者数と国際観光収入

地域	受け入れ人数 (万人)	対前年比 (%)	国際観光収入 (万ドル)	対前年比 (%)
遼寧省	92.94	25.6	55,021	18.8
黒龍江省	71.74	17.2	29,717	18.9
吉林省	29.40	8.2	8,629	13.9
三省全体	194.08		9,336,667	
中国全体	9790.83	10.0	203.85億ドル	14.6

出所：中国旅遊統計年鑑2003版をもとに作成

注：上記のインバウンドデータは外国人のみならず、香港、台湾、マカオからの入国者も含まれている。

二、東北三省の国際観光市場構成の特徴

東北三省の国際観光市場は主として、地理的に近距離にあるロシア、モンゴル、韓国、北朝鮮、日本によって構成されている。

東北三省の国際観光市場構成について、次のことがいえる。

第1に、ロシア観光市場への依存度（全体の

39.2%）が高く、ロシア人の来訪者が圧倒的に多い。

第2に、東北三省の市場構成からみれば、依存する観光市場が省によってはっきりと分かれている。すなわち、遼寧省は主に日本市場（40.3%）に、黒龍江は主にロシア（85%）に、吉林省は主に韓国（51.2%）に依存している。

表2 東北三省の国際主要観光市場の構成（2002年）

単位：人

地域	全体	日本	韓国	ロシア
遼寧省	632,970	320,136 (40.3%)	279,096 (35.1%)	33,738 (4.2%)
黒龍江省	630,509	38,914 (5.8%)	22,765 (3.4%)	568,826 (85.0%)
吉林省	230,673	24,906 (9.6%)	132,799 (51.2%)	72,968 (28.1%)
合計	1,494,152	383,956 (22.3%)	434,664 (25.2%)	675,532 (39.2%)
中国への全体	13,439,497 (11.1%)	2,925,553 (13.1%)	2,124,310 (20.5%)	1,271,635 (53.1%)

出所：表1と同様 注：（%）は構成比

三、東北三省の主要観光市場構成分析

上述したように東北三省の国際観光市場は主として日本人、韓国人、ロシア人の来訪者によって構成されている。つぎに三国の来訪者の特色について考察する。

表3は日韓露三国の訪問者の東北三省への主要訪問先を示している。

表3が示すように訪中日本人の訪問先は遼寧省にもっとも多く、そして大都市の大連と瀋陽に集中している。それは瀋陽、大連は東北三省有数の工業都市、ビジネスエリアであり、また、旧満州国時代に多くの日本人が住んでいた街であることによるものと思われる。

次に、韓国人の場合、吉林省への訪問者が多い。東北三省は朝鮮族の主な居住地で、吉林省の延辺は朝鮮族の自治州である。したがって、韓国人の来訪者は東北三省訪問の目的は同民族としてのルーツ訪問の色彩が強いが、同時に、大連、沈陽への訪問者数が多いところから、ビジネス目的の訪問者も多いと思われる。

そして、ロシア人の場合は都市への集中度が低

く、大部分は主要都市以外の国境に近い街を訪問していることが判明した。これは黒龍江の国際観光が主にロシアとの「国境観光」、「国境貿易」によって、行われていることが大きな特徴だといえよう。

このように一口に「観光」といっても、東北三省内での観光活動の様態は日本人、韓国人、ロシア人で異なるはずで、今後は、このような側面についての分析が必要であるし、課題も多くあることが感じられる。

四、東北三省の国際観光における課題と対策

1、観光PRの強化と観光地の知名度の向上

東北三省は長白山一帯や古代渤海国遺跡など、豊かな観光資源を持ちながら、意外と知られていない、あるいは異なるイメージを植えつけられて、観光対象とされにくいところがある。つまり、観光というフィルターを通して、この地域の歴史、文化を知ることができるというような観光PR活動を広く行う必要がある。

今日のような情報社会においては、観光宣伝活

表3 東北三省の主要都市への日韓露の訪問者数（2002年）

単位：人

訪問先	日本人	韓国人	ロシア人
ハルビン市	37,569	22,150	43,769
その他	1,345	619	525,057
小計	38,914	21,531	481,288
長春市	17,974	18,259	308
吉林市	1,344	5,001	1,556
延吉市	5,227	105,396	42,576
その他	361	4,143	28,528
小計	24,906	132,799	72,968
瀋陽市	49,519	101,619	10,996
大連市	233,550	101,071	13,647
その他	49,519	76,406	9,095
小計	332,588	279,096	33,738

出所：表1と同様

動が果たす役割は非常に大きい。現代観光はある意味では、観光者が得た情報を確認するために行われるものだとさえいえよう。観光情報は、観光行動者の観光意思決定や観光訪問地の決定などなくてはならないものである。したがって、東北三省の観光地の知名度を向上させ、観光市場の開発と拡大の効果を一層高めるために、観光宣伝テーマを抽出して、共同宣伝を行う必要があると考えられる。

2、観光市場構成の不均衡是正と多国周遊観光ルートの開拓

東北三省の国際観光市場の構成には、日本、韓国、ロシアのいずれかへの依存度が高すぎるという大きな不均衡が存在している。この不均衡是正

のために、日韓露中の多国間協力による周遊観光ルートを開拓して、新たな観光市場を形成することが可能であると考えられる。これまでの観光ルートは一国中心で、ボーダーレスな「多国周遊型」観光商品がほとんどない。今後これまで主流である「単一国訪問型」から「多国周遊型」の観光旅行商品へ拡大され、多国周遊型観光商品が主流に変わる必要がある。

当該地域の社会、経済、環境が整備され、観光基盤が整えば、多くの周遊観光ルートが形成され、より多く周遊できる観光旅行商品を観光者に目的地選択肢として提供できる。そうなれば観光を通して、地域内往来を促進し、地域の人々の相互理解を深めることができるであろう。

COMMENT

野村 允（金沢星陵大学）

日本人の観光行動について、省別にその特徴や背景を分析し、さらに将来展望、課題について触れられており、大変まとまったレポートとして興味深く拝聴した。

2 若干のコメント

1 感想

- ① 国際観光は、“見えざる貿易”として、国・地域に与える経済的効果が極めて大きいという認識が、中国においても高まってきている。
- ② “見えざる貿易”と言われるだけに、国・地域にとっては、観光収入と観光支出のバランスがとれていることが理想である。その点で中国は、両者のバランスがほぼとれている。しかし今後、中国の可処分所得のさらなる伸びが予想される中で、海外への旅行者は著増しよう（アウトバウンドの増加）。したがって、中国中央・地方政府としても、インバウンド増加戦略が、いま重要な課題となっている。
- ③ 東北3省においても例外ではなく、“東北振興”戦略の中で、各省が海外からの観光客誘致に重点を置いた施策を掲げている。
- ④ こうした背景の中で、今回の研究は、東北3省の国際観光市場を構成するロシア人、韓国人、

- ① 今後、この調査・研究を一層深めるため、さらなる観光行動の実態分析（例えば、観光ルート、観光ビザ・入国手続き、観光面での問題点etc）とともに、東北3省におけるアウトバウンドの動きについても調査を進めて欲しい。

- ② 東北3省の観光戦略（特にインバウンド）については、東北地方が、世界遺産を含め豊富な、個性ある観光資源を多く有するとは言え、中国の南に比べるとその知名度は低い。したがって、海外の人々に東北地方を如何に売り込むか、今後の課題は多い。以下、いくつかの課題（ソフト対応）を挙げてみた。

a) 各国（特に、ロシア、韓国、日本）の海外

- 旅行における観光行動の特徴の把握とその背景調査...生活習慣、食生活、買い物行動、興味・関心事 etc
- b) 海外客の誘致に当たり、単に観光目的のみならず、今後“東北振興”戦略の推進に伴い期待できる国際会議、商談会、産業視察に観光を結びつける工夫をする...いくつかの観光ルート（広域ルートを含め）の設定 etc
- c) 各種国際会議等を通じて、東北地方の観

- 光・産業事情などの情報の提供、P R
- d) 観光公害（環境問題、文化財・自然破壊、地域住民生活への影響 etc）に対する対応措置の検討
- e) 観光関連の人材の養成
- f) 観光は“トータル産業”であり、地域の官民挙げて、海外からの客を暖かく迎えるという意識（ホスピタリティの心）を持ち、行動することが肝要である。

北東アジアにおける観光教育

佐々木宏茂（東洋大学）

観光教育をここでは観光業界に必要な人材育成という観点に絞って、観光の最終目的は観光による対象（人、資源、遺跡文化を含めて）の理解と観光による人生の価値創造にいたるものであることの解説を試みたい。

まず、教育の一般的定義から観光教育について論じ、とくに北東アジア中国北東部の観光教育について言及してみる。

「教育は人間の諸能力をエデュケート、つまり引き出し育成することであり、しかも社会の持続と発展のために、特定の機関が一定の価値を志向して未成熟者をその社会に適応させる意識的な活動である。こうした活動は社会統制の一環として制度化される。」

こうした観点から観光教育、とりわけ業界に必要な人材育成についてみるならば、次のことが言えるであろう。

① 観光業界への人材育成は観光業の発展とともに社会の必要性によって醸成されてきた。

わが国においてのその傾向は第2次大戦後の外貨獲得から始まった。そのよい例が東洋大学短期大学において昭和38年に観光学科が置かれたこと

である。これは当時の文部省が外客接遇のためのホテルマン養成の必要をみとめたことから始まる。ただし一方において日本の歴史、文化を観光文化論、観光歴史を必修科目として設けるとの条件がついた。この点はインバウンドの観光政策と表裏一体であることを意味する。

中国、韓国においても自由市場経済とともに経済の初期段階においては同じような軌跡をたどってきたといえよう。すなわち観光誘致策とその受け入れ態勢の一環としての宿泊接遇、観光案内であり、その際その体制は経済の強いところからやってくる観光客に合わせる方法がとられる。こうした視点から見れば中国の北東部の観光は今後の発展に合わせて観光業界で活躍する人材の育成にかなり重点を置かざるを得ない状況になるであろう。

② 北東アジアの観光教育の発展段階

中国、韓国、日本という北東アジアの観光教育については、特に宿泊業という視点からみた観光教育は外貨獲得と洋式生活機能のホテルとそれに従事する教育は初期から根底には欧米の特にアメリカ的なサービス様式と管理方式の影響を受けている。それは外資導入とそれに伴うホテル建設、